

知識探訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

東北のムスリムとマレーシア人

見市 建 (岩手県立大学総合政策学部准教授)

日本のムスリム(イスラム教徒)人口は10万人程度といわれる。在住外国人の国籍からの推計である。ムスリムが多数派の国の外国人登録者数(2011年)はインドネシア、パキスタン、バングラデシュ、マレーシア、イランの順になる。無論この統計には華人やインド系マレーシア人も含まれており、仮にマレー人の割合がマレーシア国内と同じ6割程度だとすると、日本に滞在するマレーシア人のムスリムは5,000人弱ということになる。日本人のムスリムは5,000人から1万人ほどともいわれ、その多くは外国人ムスリムとの結婚などを契機に入信している。日本生まれの二世ムスリムも徐々に増え、多様化が進んでいる。

マレーシアは全国の国立大学の理工系学部に留学生を送り出しており、東京周辺や外国人研修生(労働者)が多い東海地方を除いて、おおむね各県おしなべて数十人の規模である。研修生が多数派のバングラデシュ人やインドネシア人、中古車輸出業者が多く在留年数が長いパキスタン人などとは滞日の理由や分布の傾向が異なる。バングラデシュ人やイラン人は首都圏に偏在しており、地方都市のモスクでは少数のパキスタン人と日本人ムスリム、数十人のマレーシア人留学生、百人以上のインドネシア人研修生という典型的な構成が見られる。もちろん誰もがモスクに来るとは限らず、こうしたコミュニティにはかかわらないムスリムもいる。

著者が住む岩手県には200人強のムスリムがいる。マレーシア人は30人ほどであり、そのほとんどが岩手大学に通うマレー系の留学生である。大学の近くに礼拝所として使用しているアパートの管理、断食月明けのイドルフトリおよび犠牲祭というもっとも重要なムスリムの年中行事の運営はともにマレーシア人留学生が中心になる。大学を超えた東北地方のマレーシア人留学生の集まりも盛んである。彼らは「盛岡ムスリムコミュニティ」というウェブサイトも運営しており、ハラールフードの入手といった日常的な情報交換

や子供向けの活動も行っており、断食月には海外や日本国内から説教師を招待することもある。インドネシア人は100人以上いるが、県南部の工業地帯に勤める研修生が多く、祭事には彼らは仙台のモスクに集まる。出身国別の分布において岩手県に特徴的なのはウイグル自治区出身の中国国籍ムスリムの留学生やその家族が数十人いることである。こちらマレーシア人同様、岩手大学への留学生が多いが、祖国で困難な状況にある彼らは日本で就職を望むケースが多いようである。

インドネシア人研修生は三陸沿岸部にも多いが、全国各地からの船に乗ってカツオやマグロ漁に出て、三陸で水揚げをするので正確な総数は分からない。最大の宮城県気仙沼には約800人のインドネシア人船員がおり、船着き場を歩けば容易に彼らの姿を見つけることができる。東日本大震災に際しては、塩釜で大分県船籍の漁船に乗った4人のインドネシア人漁業研修生が津波の犠牲になった。震災前の気仙沼には陸の水産加工工場にも中国人やフィリピン人らとともに数百人のインドネシア女性工員がいたが、工場が被災して全員が帰国した。彼女たちが三陸に帰ってくるのにはまだもう少し時間がかかりそうである。

< 筆者紹介 >

1973年、千葉生まれ。神戸大学大学院国際協力研究科博士課程修了。博士(政治学)。京都大学東南アジア研究所非常勤研究員、在シンガポール日本国大使館専門調査員などを経て現職。専門は東南アジア地域研究と政治学。ベールのファッションから武装闘争派のイデオロギーと活動まで、国際的な潮流を踏まえつつ、イスラーム政治運動およびイスラームをめぐるさまざまな文化や習慣を通じて現代インドネシア社会と政治の観察と分析を行ってきた。主編著に『インドネシア イスラーム主義のゆくえ』(平凡社、2004年)、『新版 東南アジアを知る事典』(桃木至朗他編、平凡社、2008年)。